

洪家拳の歴史

南派功夫 (カンフー)

南派五家拳には福建少林寺功夫 (カンフー) に深いルーツを持つ洪家拳、劉家拳、蔡家拳、李家拳、莫家拳が存在し、中国、嶺南の伝統功夫を築き上げた。その中の一つ洪家拳、洪 (ハン) の拳は、五家の中で最も有名な拳法である。よく家族や、またその流派を表すために「家」を用いられる間違いがよくあるが、そもそも「家」そしてしばしば使われる「派」は実は南の流派に用いられるのである。一方「門」は北の流派に用いられるのが常識である。洪家拳は200年以上の進化を遂げ、南派拳法を代表する流派になっていった。

陸亞采 (1745-1825)

洪家拳は、1399年に福建に設立された南派少林寺が発祥地で、陸亞采 (1745-1825)によって創始された。陸の両親は彼が幼少期に殺され、そのまま陸は、暴力的な叔父に預けられたが、その粗悪な環境に我慢できず逃げ出し、そして偶然出逢った拳法の達人、李白虎から北派の武術、花拳を習う。後に、李は陸に更に高度な修行をさせるため、陸を福建少林寺に入れる。その福建少林寺は非常に厳しい修行により優れた武道家を生む場所としても知られていた。陸が少林寺に入門すると、まず至善から教えを受けた。その至善とは後に南少林五祖、つまり南少林寺を代表する一人として知られる事となる。至善は彼をまずは門外生として受け入れ、鍛え上げ、技術を向上させていった。革命家達を訓練し、保護していた寺院が清王朝により破壊され取り壊されるまで、陸は何年もの間、至善の下で懸命に修行に励んだ。そして少林寺が滅ぼされたため、至善と他の師達は寺院から逃げ、結果、新しい九蓮山少林寺を莆田市に創設することとなるが、残念ながらその歴史は長くはなかった。陸は至善から更なる修行を探求し技術を向上させるため、既に寺院を去りそして別の場所で教えていた洪熙 (1745-1825)に預けられる。誤解されている認識として洪家拳は「洪」は、その頭文字が同じであることから洪熙 (または洪熙官とも呼ばれる) が創始者と考えられているが、実は洪拳佛掌 (一般には洪佛派として知られている) の創始者である李祖寬の師が実際の創始者なのである。洪熙の下での修行の末、陸亞采は広東省の実家に戻る。彼は革命家であることから、反清の秘密結社、洪門に入る。実は洪家拳の名前の由来はこの洪門の「洪」からきている。

黄飛鴻(1847-1925)

洪家拳は一人の武術家、黄飛鴻(1847-1925)に達するまで世代から世代に伝承されていった。黄飛鴻は広東省、南海区の喜雀という村で生まれた。洪家拳を父である黄麒英(1815-1886)から学ぶ。黄麒英は廣東十虎、つまり広東の10頭の虎と呼ばれた広東省の最高の武道家エリート10人のうちの1人でもあった。

黄は生涯で優秀な武術の腕の評判と中医学の知識を得た。彼はとても正直で道徳心の高い人物だと言われている。そんな彼の腕前を確かめるために常に挑戦者から試合を挑まれていた。彼は喜んで挑戦を受け続け、そして誰にも負けなかった。更に、黄は生涯で数千人の生徒を育て、見事な獅子芸(中国獅子舞)もこなし、そして医療院である寶芝林を持っていた事でも有名である。黄飛鴻は洪家拳の技術に更なる改良を加え、今日根強く、そして一般的に知られるほどに洪家拳を広めていった。

洪家拳は本来、短い橋手と狭い歩型、つまり「短橋狭馬」の体系をとっているがそれは福建少林寺のルーツの表れでもある。幼少時、黄飛鴻は黄家に伝わる門派でもある洪家拳を父、黄麒英から学ぶ。黄麒英は多くのカンフーの達人に息子、飛鴻を紹介しカンフーを学ばせ、深い知識を息子に習得させるため共に旅をした。

飛鴻は多くの南方の伝説的な武道家達と出会い、頻繁に交流した。中でも取り分け三人の武道家は歴史的深い関連があると言われている。

一人目は林福成。彼に会ったのは飛鴻がまだ13歳の頃だった。林は有名な武術家である梁坤の弟子であり、その梁坤とは鐵橋三(1815-1887)の名前でも知られ、廣東十虎の一人でもあり、そのあまりにも信じがたい力と強さから悪名も高かった。鐵橋三のカンフーの流儀は鐵線功つまり鉄糸力に基づき、これは内部の腱の練功であり、これが鐵橋三の強さの秘訣でもある。黄飛鴻は林福成に付いて彼の技を学び、鐵線拳と言われる身体の腱を徹底的に刺激するために形成されている内功法を習得するため二年間集中的に修行した。黄は後に、これらの方法や概念を彼の武術の至る所に取り入れて洪家拳の最終段階そして最高の奥義へと導く腱を鍛える身体内部の練功法「鐵線拳」へと進化させていった。鐵線功は武気功であり、黄飛鴻のカンフーは一つの内家功法であり。そのコンセプトである鐵線功は前述の鐵線拳という一つの型に集約されているが、実は、他の套路にも鐵線功は含まれている。工字拳は一つの鐵線功である。

第二の師は喇嘛（ラマ）派の王隠林である。喇嘛派とはチベットが起源であると言われ、もともとは獅子吼として知られていた。王隠林と黄麒英が伝説の武闘集団、廣東十虎の一員である事から、彼らは専門的な技と理論を交換し合った。喇嘛派の特徴としては南派の動力を思わせる長拳の体系をとり、北派の理論と型の精密さを持っている。この流派に刺激され王隠林は彼の持つ多くの手技を拡張し、喇嘛派の多くの長打の技を取り入れ、更にそれは歩型に影響し、強固な下半身と、繋ぎの動作に緩みを与えた。その他の喇嘛派との関係は前述の鐵橋三はこの王隠林の師、星龍から喇嘛派を学んでいた。

三人目の達人は北派のカンフーを専門とする宋輝鏜。宋輝鏜は無影脚と呼ばれる蹴り技に秀でた達人である。黄は交流試合で宋と戦う際、黄は前進する度、己が蹴られたことを実感し、その繰り出される蹴りは、黄が今まで見たことがないほど驚くべきものであった。戦いの後、彼らはお互いの能力に感銘し合い、友となり、技を交換し合った。黄は彼に鐵線拳を教え、彼から無影脚を教わり、その蹴り技を彼の流派に取り入れ、洪家拳をより戦闘武術として世に知らしめていった。

これら三人の達人から大いに影響された黄飛鴻は洪家拳の体系を作り直すことを決意し、「長橋大馬」と呼ばれる長打の手技と幅広いスタンスを持つ今日見られる洪家拳の姿へと変化させていった。黄飛鴻以前のいくつかの洪の流派は旧式のバージョン、つまり「老洪家」と呼ばれ、現在でも存在している。しかし現在のほとんどの洪家拳の系統は全て黄飛鴻から伝授されたもので、それは彼の高度な再構成を表し、今日、洪家拳のパイオニア、第一人者として知られる要因でもある。